様式２

平成２６年度　自 己 評 価 表

H27.3.2　鳥取県立八頭高等学校

中長期目標（学校ビジョン）	1　進路指導を充実させ、確かな学力を身につけさせる。 2　教育活動全体を通して人格の形成に努める。 3　地域における八頭高ブランドを高め、全県に向けコースの特色を打ち出し、魅力ある学校づくりを推進する。

今年度の重点目標	Ⅰ　八頭高生らしい生活態度の育成　　Ⅱ　学力向上に向けた積極的な取り組み Ⅲ　文武両道の実践　　Ⅳ　特色あるコース（探究コース、体育コース）の教育活動の推進 Ⅴ　中高連携の充実

年度当初					評価結果　（３）月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
Ⅰ　八頭高生らしい生活態度の育成	1　基本的生活習慣を整える	(1) 年間を通して欠席者が多い。 (2) 服装頭髪はおおむね良いが、数名乱れのある生徒がいる。 (3) 校内での携帯電話の使用ルールはほぼ守られている。 (4) 通学マナーについての苦情が数件ある。	(1)欠席者の数が減少している。 (2)端正な服装頭髪である。 (3)使用ルールを守って携帯電話等を利用している。 (4)交通規則を守ってマナーよく登下校している。	①生活習慣の見直しとストレス解消法を見つけさせ、心身の健康指導をする。 ②定期的に頭髪服装指導を行うと同時に、日常的に点検指導する。 ③保護者の理解を得て、家庭との効率的な協力体制を作りあげる。 ④通学マナーアップ運動を展開する。	(1)翠陵祭で保健委員会が睡眠の重要性について発表、意識を啓発。また、学校保健委員会にて、保護者にスクールカウンセラーの相談が受けられることを情報提供した。保健室の内科的利用者数及び欠席者数は減少傾向にある。 (2)制服の着こなしは生徒の意識が向上してきた。 頭髪については再指導の生徒が少数ではあるがいる。 (3)保護者への生活指導の方針の周知度が60%である。(学校評価アンケート) (4)本年度は通学についての苦情が激減した。	B	①基本的生活習慣は、これから一生ついてまわるものである。正しい生活習慣の意識づけや習慣化させるようにする。日々の生活の中で保護者との連携を密にし指導していく。 ②特に女子生徒の着こなしがよくなってきたので、継続的な声掛けを継続する。　保護者の理解をさらに深め、落ち着いた環境で学校生活を送れるようにしたい。 ③PTA総会などを利用しながら保護者へ広く周知を図る。 ④継続して取り組む。
	2　挨拶の励行	(1) 校内全体に挨拶を交わす習慣がほぼ根付いている。	(1)・校内外でさわやかな挨拶が交わされている。 ・来校者、近隣の方々への挨拶が励行されている。	①部活動集団を軸に、学校内外でさわやかな挨拶を交わすよう呼びかける。	(1)学年の進行に従って挨拶ができるようになっている　部活動集団への働きかけが有効である。	A	①職員の挨拶が生徒に与える影響が大きい　部活動指導と関連付けて習慣化したい。また地域の方々への挨拶励行を進める。
	3　教室等の整理・整頓	(1) 朝掃除を全員で実施している。 (2) 教室内ロッカーの整理、整頓がほぼできている。 (3) 教室内のゴミ箱を撤去し、ゴミの持ち帰りを励行している。 (4) 机などへの落書きがまだある。	(1)全校生徒職員が清掃に携わっている。 (2)教室内ロッカーが整然としている。 (3)ゴミの投げ捨てがない。 (4)校内施設の破損、落書きがない。	①清掃区域、監督者の適正な配置を行う。 ②清掃時に点検し、不十分な箇所を整える。 ③ゴミ持ち帰りを引き続き励行する。 ④使用マナーアップを呼びかけると同時に生徒主体の「落書き消し」活動を実施する。	(1)ほぼ適正に配置できている。 (2)概ね整ってはいる。 (3)自販機紙コップの後始末が十分ではない。 (4)ほぼできている。	B	①②③④ 継続して取り組む。
	4　授業を大事にし、集中させる	(1) 予鈴で着席し、始業合図とともに授業を始める態勢がまだ確立していない。 (2) 授業でのグループ活動、ペア活動を取り入れつつある。 (3) 授業を受ける態度は概ねよい。	(1)予鈴で着席し教材等の準備をして教員の到着を待っている。 (2)授業に集中させる工夫をしている。 (3)授業中の私語、居眠りがなく授業に集中している。	①教員が予鈴前に教室に入り、授業準備させる。 ②③発表、演習、討論などを効果的に取り入れた授業改革に取り組む。	(1)学校評価アンケートで、「予鈴で着席するなど授業時間を大切にしている」と回答した生徒が93%。「生徒は授業時間を大切にして学力の向上に取り組んでいる」と回答した職員が77%。(学校評価アンケート) (3)授業を受ける態度は概ねよいが積極的な参加が望まれる。	B	①予定前に動き出し、授業に集中させる取組を継続する。 ②③引き続き取り組む。
Ⅱ　積極的な学力向上に向けた取り組み	1　主体的学習による確かな学力の育成	(1)毎日欠かさず自宅で学習する習慣の生徒が59%。 (2)自宅学習時間の学年目標（1，2年1日平均2時間30分以上、3年生毎日4時間以上）達成率:1年23.6%　2年25.9%　3年31.8%。 (3)学習到達度の維持向上率が68.1%。(スタディサポート) (4)3年間を見通した具体的な学力向上策が未確立。	(1)毎日欠かさず自宅で学習する生徒が100%。 (2)自宅学習学年目標時間達成率が向上。 (3)スタディサポートにおける到達度（個人）の維持向上率100%。 (4)3年間を見通した学力向上策が確立。	①家庭学習につながる授業を行い、テスト、課題を適切に配置し、目標を一つずつ達成させる。 ②自学する環境（自習室等）を整備する。 ③個人成績票をもとに、個々に今後の方針や目標を立てさせ、実行させる。 ④学力向上委員会を設置し方策を検討実施する。	(1)毎日自宅で学習する生徒が64％（12月学校評価アンケート） (2)3年放課後自習室は12月まで実施し、生徒はよく利用していた。)平日の自宅学習時間（11月調査）2時間半以上の1年24.1%（昨年とほぼ同じ，4月より減少）、2年17.5%（昨年より減少，4月より増加）、4時間以上の3年30.2%（昨年より減少，4月より増加）（自宅学習調査）。課題未提出者に対する放課後特別指導を実施（2年）。 (3)7月全国模試の結果を受け、11月全国模試に向けて生徒に目標設定を行わせたが、成績維持（3科全国SS±1ポイント）または向上者は、1年生で167名（60%）、2年生で138名（53%）であった。 (4)前期に学力向上委員会を2回実施し、現状と課題を共有した。学年ごとの全国模試分析検討会で教科ごとの学力対策を検討した。	C	①継続して取り組む。 ②1，2年においても必要に応じて自習室を開設する。 ③方針や目標を設定させたうえで、個別面接により具体的な取組みを確認する。 ④生徒の学習状況と全国模試の推移をもとに、学力向上へ向けた具体策を検討する。
	2　授業力向上	(1)研究授業未実施教科がある。 (2)日常的な相互の授業参観と意見交換が少ない。 (3)授業改革の途上である。	(1)全教科で研究授業を実施している。 (2)相互授業参観と意見交換が行われている。 (3)授業力向上に関する研修、研究会に職員の60%以上が参加している。	①6月、10月を研究授業月間とし、有効活用する。 ②5月、11月に見学授業月間を設ける。 ③校内授業研究会を開催する。また校外の研究会、研修会への出席を促す。	(1)(2)国、公民、数、理、保体、英で研究授業を実施し研究協議を行ったが、見学授業については十分に活用できなかった。 (3)国語、数学、英語、理科、地歴で校内授業研究会を開催。他校からの教員も招いた。校内外の授業改善に関する研修会への参加率は87.7%であった。	B	①②③継続して取り組む。
	3　進路意識の高揚	(1)進路志望調査で「未定」の回答がある。 (2)進路学習・個別面談を実施している。 (3)国公立大学志望者数が学年進行とともに減少している。【1年約70%、2年約60%　3年約50%】 (4)大学入試センター試験出願者数163名（59.9%）	(1)「未定」の回答割合が学年進行に伴って減る。 (2)「自分の進路を実現するために努力している」生徒の割合が学年進行に伴い増加している。 (3)国公立大学志望者割合の維持向上。 (4)大学入試センター試験出願者数の増加	①生徒との面談を重ね、進路目標をより明確にさせる。 ②進路学習を通して進路目標、学習目標を設定させる。 ③進学先として、国公立大学調べを勧め、興味や関心を高める。「夢ナビライブ」を活用。 ④進路学習を通して、大学進学意識を高め、学力の向上にも取り組む。	(1)志望調査では、「未定」の生徒が1年生4月19名から10名、2年生4月20から6名に減少した。 (2)進路実現のため目標に向かって努力している生徒…1年:70%，2年：69%，3年93%，全体77%（学校評価アンケート）。職員の面接研修を2度実施。学年ごとで計画された進路学習を実施。1年職業観の育成、学問研究　2年学部学科研究　3年入試研究。 (3)進路学習により主に国公立大学を対象とした学部学科研究を行った。国公立大学志望者割合は、1年生が4月66%から11月75%に増加、2年生が4月59%から11月57%とほぼ変わらなかった。夢ナビライブには2年生希望者41名が参加。 (4)学年ごとに進路講演会を開催し、進路意識の向上をはかった。一方、今年度の大学入試センター試験出願者は156名で、昨年よりわずかながら減少した。	B	①継続して取り組む。 ②学年の状況に応じて進路目標がより明確になるようにする。 ③進路意識向上が学力向上につながる取組を検討する。 ④高い進路目標を維持させるよう指導し、より多くの生徒がセンター試験へ向かえるよう学力をつけさせる。また保護者に対して進路関係の情報を伝達する機会を設ける。
Ⅲ　文武両道の実践	1　学習と部活動の両立	(1)両立できている生徒の割合が50%程度である。 (2)H26年4月部活動加入率が87.9%（兼部なし）である。 (3)H25年度全国大会出場部活動はホッケー男子、柔道男女、陸上競技、放送、書道　延べ53人。中国大会以上の出場部活動数は18。	(1)両立できている生徒が70%以上である。（授業アンケート） (2)加入率の維持。（5月、10月部員数調査） (3)全国大会はじめ上位大会出場部活動数の増加。	①部活動顧問が学習の場を積極的に設けるなど、学習時間を保障する。 ・学習が不十分な生徒の部活動を制限する。 ②部活動加入と活動継続への働きかけ。 ③上位大会出場を目指す意識を持たせる。	(1)両立できているとする回答が生徒全体の61%部活動に所属している生徒の75%（学校評価アンケート）。1・2年全体の62%（授業評価アンケート12月） (2)12月現在加入率が88.5%（兼部なし） (3)中国大会以上出場部活動数は23。全国大会出場者は延べ57人。	B	①②③継続して取り組む。
	2　自治精神を高める生徒会活動	(1)生徒会主導で「朝の挨拶運動」、「八頭高愛し愛され計画」等を計画し実践している。 (2)翠陵祭の節度ある企画、運営ができている。 (3)各種委員会活動が活発である。	(1)自主的に生徒会活動を計画し実施し、生徒参加者が増えている。 (2)翠陵祭の運営が円滑に行われている。 (3)各種委員会活動の取組が全校に浸透している。	①朝の挨拶運動、落書きなくそうキャンペーン等の啓発活動を行う。 ②翠陵祭の企画と運営。 ③各種委員会の活動を広報し、生徒に参加を呼びかける。	(1)朝の挨拶運動を毎日実施できた。 (2)翠陵祭を日程通り開催できた。 (3)各委員会とも年間を通じて活発に活動した。	A	①②③継続して取り組む。その中で生徒会活動活性化に向けた新しい活動目標を設定する。また「愛し愛され運動」を促進し、研修の機会を設ける。
Ⅳ　教育活動の推進（探究・体育）の特色あるコース	探究コース ※次代に要求される学力を身に付けた生徒の育成	(1)2年次探究ゼミを実施。 (2)2年次鳥取大学体験実習を実施。 (3)1年次探究コース主催学習セミナーを実施。	(1)探究ゼミ活動、ゼミ発表の質向上。 (2)鳥取大学体験実習の継続と満足度向上と進路志望先の具体化。 (3)探究コース生徒の学習意欲向上。	①土曜授業を有効活用する。 ②出前授業などを通じて、地元大学、博物館などとの連携を強化する。 ③2年次、3年次にも学習セミナーに準ずる取組を行う。	(1)9/16中間発表、2/3最終発表実施。土曜授業は1グループが活用。 (2)11/10鳥取大学体験実習実施。 (3)夏季休業中に、2年生希望者が東京大学主催難関大学説明会に参加。	C	①次年度より探究ゼミにおいて、鳥取大学や環境大学、企業、地域との連携を図るなど、改革を実施する。 ②大学との連携を密にし、早期に日程を具体化する。 ③都市部で行われる主要大学説明会への積極的参加を進める。
	体育コース ※魅力ある運動部活動と部活性化の中心となるリーダーの育成	(1)運動部活動において中国大会・全国大会出場者の50%を占める。 (2)運動部活動の運営において中心を担っている。 (3)体育コース独自の行事（オリエンテーション合宿、臨海実習等）を実施している。	(1)全国大会出場者数の増加。 (2)学校生活、運動部活動の運営においてリーダーとなる体育コース生の増加。 (3)特色ある行事の継続。	①競技力のみならず精神面での成長を支援する。 ②体育コース集会、教科担当者会を定期的に開催し、意識を高める。 ③体育コース独自の事業を改善しつつ継続する。	(1)平成25年度12人（全体22人の54%）から37人（全体60人の62%）に増加。 (2)上級生(3年生)がリーダーシップをとって運営できて いる。 (3)コンディショニング講習会・エアロビクス講習会に積極的に取り組んだ。	B	①②継続的に来年度も取り組む。 ③講習内容の見直しを検討しながら充実した講習を目指す。
Ⅴ　中高連携の充実	八頭町内中学校等との連携推進	(1)中高連携事業、行事を継続して実施している。 (2)教科（数学）でつながる「鳥取発新スクラム教育」の拠点校として八頭町内3中学、郡家西小学校と連携。 (3)若桜学園「英語教育強化拠点地域事業」の協力校。	(1)・高校生活への意欲、関心の向上。（アンケート） ・入学時希望進路の明確化。 （文理志望選択、進路希 望校種選択） (2)数学基礎学力の定着。 （1年スタディサポートにおける到達度の向上） (3)英語基礎学力の定着。 （1年スタディサポートにおける到達度の向上）	①中高連携リーダー会を機能させ、生徒、地域を巻き込んだ連携を促進する。 ②小中高担当教員が課題を抽出、分析し、教科指導力向上を目指す指導案を作成、実践する。 ③中高教員の授業研究、授業交流を促進し、効果的な指導法を開発し、実践する。	(1)建設的な関係性を構築でき、有効に機能している。 (2)数学科によるプロジェクトならびに英語科文科省事業を有効活用し，課題の抽出とその克服に向けての研究実践を進行中。 (3)中高合同教科指導研修会を複数回開催するなど，指導ポイントの共有化を進めている。	B	①地域にどう関わるか，地域をどう巻き込むか，についてより積極的な動きを検討し、町内小中高の連携を太くしていく。 ②③継続して取り組む。

評価基準　A：十分達成〔90%〕 B：概ね達成〔80%程度〕 C：変化の兆し〔60%程度〕 D：まだ不十分〔40%程度〕 E：目標・方策の見直し〔30%以下〕